

# 信貴山縁起に学ぶ富の交流

山梨大学名誉教授・前山梨大学副学長 伊藤 洋

奈良県生駒郡にある信貴山朝護孫子寺の謂れは、「信貴山縁起絵巻」に著わされてつとに有名である。この日本三大絵巻の一つの基となったのが「宇治拾遺物語」第一〇一話「信濃の国の聖の事」である。今日は、そこから話を始めよう。

この話の主人公は信州出身の僧・命蓮みょうれんである。彼は、奈良東大寺で受戒を遂げて、さて故郷に帰ろうかと思つたが、信濃は「無仏世界」(仏の不在)の未開の地)なので、大仏の前で辺りを眺めて、いと、未申の方角に信貴山と、山頂がかすかに見える。そこで信貴山を修行した場所と定めて住み着いたという。

当時の信貴山は未開の山岳地帯。僧侶といえども衣食住には困窮するのだが、この命蓮を助けたのは麓に住み、原までは「下種徳人」と少々蔑まされた表現で書かれた一人の命蓮と百姓の命蓮の関係は、力が授かった。命蓮には、法

毎朝信貴山頂から托鉢用の鉄鉢を飛ばす。この鉄鉢は百姓家に届くと農家はこれに一日の食事を入れる。すると鉢は再び山頂へ帰っていく。このように「聖なる世界」と「俗なる世界」とが、鉄鉢によって結ばれてい

た。この安定的な「交流」によつて、命蓮は修行に専念でき、百姓は命蓮の法力に守られ、豊かな実りの結果、百姓はついに「山の長者」と言われるまで栄えるようになった。

こうなつても、山からは毎日鉄鉢が飛んでくる。長者は、段々疎ましくなつてきた。ある朝、鉢が校倉に入つたところ、戸を閉めてこれを閉じ込めた。鉢は、帰れなく倉ごと持ち上げた。と倉まですべて信貴山頂まで持ち上り、石を運んでしまつた。米俵は全部を再び謝つた。米俵は全部を再び謝つた。米俵は全部を再び謝つた。

「雀」のよみは、空を飛ばし、返つた。米俵は全部を再び謝つた。米俵は全部を再び謝つた。米俵は全部を再び謝つた。

奇想天外な画像は三巻のあ

